



歴史のかんがい施設

最上堰

地域の将来を見据えた文四郎のたゆまぬ努力

中山町を中心とする3市3町にまたがる約1,200haの農地を潤す最上堰は、今から約130年前に「柏倉文四郎」、「安孫子兼治郎」によって作られた農業用水路である。

当時の長崎村（現中山町）では、近くを流れる最上川が農地よりも低く、何度も水を引く工事が行われてきたが、どれも失敗に終わっており、天水に依存した不安定な地域であった。柏倉文四郎は17歳の時に「大江町から隧道を掘れば長崎村に水を引くことができる」と考えたが、莫大な金がかかるため周囲に反対された。諦めず独自に調査を続け、明治6年に名主になってからは、工事の必要性を説いて回り、2度の干ばつを経験し農家も立ち上がったが、費用の調達ができず再び頓挫。それでも東京に陳情に行ったり、密かにドイツ人技術者に測量設計をさせたりと、工事の実現につながる努力を根気強く続けていた。

明治20年に大干ばつが起き、文四郎と同じ考えを持つ安孫子兼治郎は、県の技術者を招いて測量をさせていた。兼治郎は文四郎の計画を知っていたので、合同で工事を進めようとし意気投合。明治21年に公金の借入が可能となり、述べ8万人を動員して8カ月という短期間で完成させた。文四郎が志してから30年後のことであった。



功労者の胸像

左：柏倉文四郎 右：安孫子兼治郎

最上堰の概要

●受益地:

約 1,200ha (中山町、山辺町、寒河江市、大江町、山形市、天童市の3市3町)

完成当時は約 710ha であったが、明治、大正、昭和、平成と改修を重ねて現在の形になっている。

●水路延長：約 23 km (うちトンネルが約 5.5 km)

昭和 40 年代の堰の改修工事の様子



①頭首工の取水ゲート



②水路トンネル



③柳沢除塵機



④最上堰放水路

歴史を伝える最上堰土地改良区の取り組み

現在は水路が整備され、安心して農業ができるようになってきている。施設の管理は、最上堰土地改良区が行っており、地域の人から大切に思われている最上堰の歴史と知ってもらおうと、毎年10月と11月に町内2つの小学校(豊田小、長崎小)の4年生の児童を対象に、施設の見学会を行っている。